

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：32641

研究種目：新学術領域研究(研究領域提案型)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H06340

研究課題名(和文)トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 - 多文化をつなぐ顔と身体表現

研究課題名(英文)Construction of the Face-Body studies in transcultural conditions

研究代表者

山口 真美(Yamaguchi, Masami)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：50282257

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 72,710,000円

研究成果の概要(和文)：顔や身体表現は、個人が何者であるかを常に発信する媒体である。文化間の壁が取り壊されると同時に、新たな文化が作られる「トランスカルチャー状況」において、顔や身体に対して人間が無意識に持っている感覚を、心理学・文化人類学・哲学の綿密な連携により、多角的に解明した。さまざまなイベントを通して社会との議論の場を持つとともに、顔や身体に関わる差別の問題についての研究倫理を発信し、人文・社会科学分野の中に顔身体学を位置づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

心理学、文化人類学などの実証的なアプローチに加え、顔と装いに関する哲学的な視点も取り入れることで、アカデミックな領域のみのインパクトを越えて、広く社会全体にトランスカルチャーの意義と視点を広げていくことができた。哲学は言葉と概念を駆使し、個々の事実とその解釈を一つの表象へとまとめ上げていく作業でもある。顔をめぐる他者理解/異質性の理解の問題を、広く社会に啓蒙していく手段を模索した。また、哲学をベースに化粧や装いについても広く考察しながら、ヴェール・スカーフや仮面などがもつ社会的意味を考察し、女性ならではの視点から広く啓蒙していくことを可能とした。

研究成果の概要(英文)：Facial and bodily expressions are mediums through which nothing can be hidden; they conspicuously reveal individual histories and allow a person to be read by others. In the current atmosphere of growing globalization, this project aims to bring awareness regarding the unconscious facial and bodily expressions and cultural differences in such expressions. Using psychological, anthropological, and philosophical perspectives, this research aims to reveal differences in facial and bodily expressions across diverse cultures, and to explore the possibilities for developing a cultural understanding through faces and bodies. This study aims to promote the understanding of other people and cultures by bringing unconscious facial and bodily expressions to conscious awareness. By bringing primitive, unconscious facial and bodily expressions to conscious awareness, this study aims to promote the understanding of the communication of various cultures, and the acceptance of heterogeneous people.

研究分野：実験系心理学

キーワード：顔身体学 心理学 文化人類学 脳科学 哲学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

顔と身体表現は、常に個人の由来を露出・顕著に表し、その個人が何者であるかを解読可能とする媒体である。インターネットの普及や、移住者・外国人労働者の受け入れが拡大する中で、現代社会に生きる人類は、これまでにない大量の顔と身体表現にさらされることとなった。その中で、自分と肌の色や性別が違う人を違う目で見てしまうといった「壁」の存在が再認識される。我々日本人にとっても、「刺青」に対する忌避感やヴェールをかぶった女性に対する違和感は身近にあり、異質を捉え直す時期にあると考えた。そこで、文化の壁を取り壊す力と文化を作る力が同時に働いている状況を「トランスカルチャー状況」と定義し、個人が自らの顔や身体と向き合いながら、どのようにトランスカルチャー状況に適應するかに注目した。

2. 研究の目的

現代社会が直面しつつあるトランスカルチャー状況下への解決策のひとつとして、顔と身体表現に対して無意識的・潜在的に持っている感覚を明らかにし、意識化することを目指す。壁を壊しつつ、壁を作り上げること避けられない人類の特性について、個のあり方に焦点を当ててとらえていく。誰もが他者の視線にさらされ続け必ず持っている「顔」と「身体」という対象を用いて、人文・社会科学分野を再構築する。

3. 研究の方法

心理学、文化人類学などの実証的なアプローチに加え、顔と装いに関する哲学的な視点も取り入れた研究を進めた。「顔と身体表現の異文化性検討」では、フィールドワークの手法を通して、衣類・装飾・舞踊といった身体表現や、顔や身体を用いた感情表現の文化依存性・多文化性について検討した。「顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明」では、心理学・脳科学的手法を用いることで、顔や身体認識様式の文化差を明らかにするとともに、その形成過程やメカニズムを探った。「顔と身体表現の比較現象学」では、トランスカルチャー概念の再定義や洗練化を行うとともに、顔をめぐる他者理解/異質性の理解の問題を社会全体に啓蒙する活動を行った。これらに加えて、美学、化粧学、考古学、社会学などの観点から、時代や社会を超えて存在する顔や身体表現の理解が深められた。

4. 研究成果

本領域は心理学・文化人類学・哲学といった既存の研究分野の枠組みを超えて、さまざまな文化の中での顔と身体表現に関する共通性と異質性を、個人内・外・間という3つのレベルで多層的にあぶり出し、意識化されない部分を解明して呈示することにより、文化によって得られた、あるいは失われた他者理解の在り方を再構築し、東アジア文化圏に位置する我が国から人文・社会科学領域として新たな研究領域を構築した。異文化比較を前提とする研究の性質上、フィールドワークに基づいた文化差比較や異文化間での実験の実施、さまざまな文化的視点からの現象学的分析を行う必要があり、また研究領域の国際的プレゼンス向上と国際共同研究の発掘・発展に向けて、国際活動支援班を設けた。研究期間の前半においては、哲学班を中心として心理学と文化人類学の視点も盛り込んだ議論を集中的に行い、「トランスカルチャー」という現象が、複数のレベルにおける矛盾した二方向の力のせめぎあいからできていることを明らかにし、「トランスカルチャー状況下」を異文化が出会うところでそれぞれの文化そのものが常に更新される状況であると定義した。この領域全体の研究の基軸を固めることで、様々な研究分野からの自由な発想での公募研究の参加を可能にしながら、ブレのない領域の展開を行うことができ、人文社会系からだけでなく、総合系・理工系・生物系のすべての系からの研究者が参加し連携する異例の新学術領域になったと言える。例えば、実験心理学と文化人類学の連携は、今まで実験室に籠もりがちであった実験心理学者をフィールドに連れ出し、文化と社会に埋め込まれた顔身体を体験させるとともに、文化人類学者に(いわゆる)科学的手続きの辛さと喜びを伝える試みであったが、その成果はお互いの学問分野の更新につながっただけでなく、短期間の間に学術論文としても発表されているという点で特筆すべきものである。また、他の新学術領域との合同シンポジウム(例:個性創発脳、出ユーラシア、対話知能学)などでは、新しい研究のアイデアと共同研究が生まれることとなった。本研究領域は、既存の学問分野の枠に収まらない領域の創成を目指す領域のモデルケースであると自負できる。

本領域5年間の研究実績としては以下が挙げられる。

2017年度は、一般向けに本領域を広めるための哲学カフェ形式の「顔身体カフェ」を代官山と金沢で開催した。哲学班主導で2017年8月に国際理論心理学会における顔身体シンポジウムを行い、また2018年3月にはB.アンドリュウ講演会と公開シンポジウムを行うことにより、哲学分野で本領域を広める試みを行った。さらに人類学班主導で、文化人類学的実践と知見を他分野に広めるバリ島ワークショップを行い、異文化を実際に体験する試みと、心理班によるフィー

ルド実験の試みを行った。

2018年度は、領域主催（共催）イベントや施策を多数実施し、領域からの研究成果の発信に注力した。中でも、2019年3月に開催した国際シンポジウム「トランスカルチャーとはなにか？ - 心理学と哲学の協働」では、かねてより課題だったトランスカルチャー状況の定義について、プロジェクションマッピング、トランスジェンダー等の具体例を心理学的、哲学的、文化人類学的視点から論じ、領域としてトランスカルチャーをいかに定義づけるかを議論するよい機会となった。本企画は、同じく新学術「多元的質感知」領域との共催だったことを報告しておく。領域運営面では、年2回の領域会議と数回の総括班会議を開催し、領域内の情報共有化と交流円滑化を図った。領域ウェブサイトやSNSを通じて、領域関連の研究成果やニュース等を広く一般に告知した。若手研究者支援としては、心理班合同WSの開催、領域会議での若手ポスター発表賞の授与等を実施した。

2019年度は、まず中間評価報告書の作成に始まったが、各班の協力を得て作成・提出し、最終的に評価Aを獲得した。活動としては、例年通り年2回開催の領域会議（2019年8月と12月）を開催し、各班の研究の進捗状況の確認を行った。また2019年度より若手のポスター発表賞を設け、若手研究者の領域への積極的な参加を促した。他にも若手研究者をターゲットに、研究発表会を3回行っており、若手のプレゼン能力の向上にも努めた（内2件は国際ワークショップで、海外から著名な研究者にも参加してもらった）。

2019年度の特徴的なイベントとしては、各関連学会の年次大会において4件の国際シンポジウムを顔身体学領域で企画・開催（APCV(Asia Pacific Conference of Vision)で2件、日本心理学会大会で1件、日本顔学会大会で1件）し、最新の研究成果の発表を行ったことである。また、哲学班を中心に「Radical Embodied Cognition, East and West」と題して、身体性認知に関するシンポジウム（2019年8月31日）ならびに関連ワークショップ（2019年8月27日、28日）を開催し、国内外から15名の講演者が発表する国際色豊かなものとなった。その他、人類学班を中心とした第4回公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」、心理学班を中心に顔認知の研究において世界的に著名なJames Tanaka教授（カナダヴィクトリア大学）を招聘し顔認知の全体処理（holistic processing）をテーマにした国際シンポジウムを開催した。年度終盤に2件の国際シンポジウムを予定していたが、2020年2月に始まったCOVID-19感染拡大により延期を余儀なくされたが、2020年度に、開催形式をオンラインに変更してどちらのシンポジウムも開催している。

2020年度はコロナ禍中での研究遂行となったが、各研究班が柔軟に対応し、オンラインを駆使して研究を進めた。また取得済みのデータの解析を進めるなどし、研究成果につなげることを目指した。年2回（2020年6月、12月）の領域会議もすべてオンライン開催となり、zoom、slack、gather town等オンラインアプリを駆使して口頭発表、ポスター発表ともにスムーズに行うことができた。特にslackを用いた質疑応答は、会議終了後も延々と議論が続くなど、活発な研究交流の場となった。顔と身体を扱う領域のため、コロナ禍でのマスクによる顔認知の変化やオンライン会議における二次元顔コミュニケーションの影響等、マスクからの問合わせが格段に増え、領域関係者のメディアへの露出が増えた。また、コロナ禍で領域関係者が感じたことを一般向けにブログ化し、発信した（後に「2020年コロナの記録 - 顔・身体学から」と題した冊子にとりまとめた。）。領域全体による大きな研究成果として、領域関係者多数が関わり執筆、編集した「顔身体学ハンドブック」（東京大学出版会）の刊行が挙げられる。コロナ禍以前は頻繁にあった海外との往来がほぼなくなり、国内でできることを手探りで模索しながら始めたのが、心理学、哲学、文化人類学それぞれの研究手法について勉強する機会を設けたことである。これによって若手研究者のみならず、領域関係者の多くが各分野についての理解を深め、さらなる融合研究が生まれるきっかけとなった。オンラインでの若手研究会もシリーズで開催し、多くの参加者による活発な議論が行われた。国際イベントについても、昨年度から延期された2件を含む3件をオンラインで開催した。また、ポストコロナ時代を見据えた身体の未来像について考えるシンポジウムシリーズを企画・開催、また障害と身体性についてもシンポジウムを開催した。

2021年度前半は緊急事態宣言が発令された中での研究遂行となったが、今までの研究成果を踏まえて対面あるいはハイブリッドでの情報発信を多数行った。領域会議（2021年8月、2022年3月）はハイブリッド形式で実施した。また、顔身体学領域の集大成として国際シンポジウム「Face-body Studies Wrap-up Symposium」を開催し、海外の著名な研究者に講演いただいた。国内シンポジウムとしては、文化心理学、社会心理学、発達心理学、認知考古学の研究者がそれぞれの立場で顔身体学を紐解いた「顔身体の進化と文化」シンポジウムを開催、領域主催として、パラリンピアンを迎えて顔身体学の観点からパラリンピックを考察するシンポジウムを開催した。ルッキズムについてのシンポジウムも開催、予想を大きく上回る聴講者が参加し、活発な議論が交わされた。さらに、領域主催の公開シンポジウム「シンクロする身体 - ポストコロナ社会における身体の未来像」ではソウルオリンピックのシンクロナイズドスイミング・デュエット競技銅メダリストの小谷実可子氏・田中ウルヴェ京氏を特別ゲストに迎え、ポストコロナ時代を見

据えた身体の未来像について講演とパネルディスカッションを行った。毎年刊行していたニュースレターの総まとめとして最終号を発刊し、5年間の研究成果報告や計画班、前期後期公募班の活動報告を行った。また、領域の成果としては領域関係者が多くかわり執筆した書籍「コロナ時代の身体コミュニケーション」(勤草書房)が挙げられる。ポストコロナ・ウィズコロナ社会を見据え、領域内のさまざまな分野の研究者たちが顔身体を通して社会を考察する一冊となった。さらに、2022年12月には、「A+」の事後評価とともに「新学術のモデルケース」との講評を得ることができた。

本領域は若手育成も、(1)若手研究者自身への研究サポートと連携の機会の創出、(2)領域内外との共同研究の推奨と促進、(3)海外共同研究の推奨と促進、の三つの側面から推進してきた。

(1) 若手研究者自身への研究サポートと連携の機会の創出：

本研究領域においては、研究組織を構成する際に、若手研究者の積極的な採用(計画班への参加・公募班での採用)を行ってきた。さらに、採用した若手研究者のインセンティブの確保のために、若手研究者による自主的な研究会の支援も行なってきた(電子情報通信学会HIP研究会、知覚研究会、合同ワークショップでの英語による発表、顔身体カフェへの参加など)。また、全9回行った領域会議でのポスター総発表数323件中215件(67%)が若手による発表だった。研究実績にも記載のとおり、若手対象にポスターアワードを4回実施し、ポスター発表179件中130件は若手研究者(公募班の若手研究者も含む)によるものとなり、そのうちアワード対象のポスター発表は82件であった。他にも、本領域が主催した国際シンポジウム(「トランスカルチャーとは何か?」(2019.3.2-3))では、最大で講演者10名中8名が若手研究者という、異例の若手率となっている。これは、本研究領域における若手研究者へのサポートを反映しており、領域の原動力が若手研究者であったことを示している。

(2) 領域内外の共同研究の推奨と推進：

若手研究者の育成には、研究者本人の研究の推進や研究内容の深化、研究ネットワークの拡張に向けた共同研究の経験と、それによる研究業績の蓄積が必要であるという認識から、上記の若手研究会や領域会議の場を活用して、共同研究を開始あるいは展開することを推奨してきた。その結果、計26件の国内共同研究が行われており(領域内:19、領域外:7)、若手研究者の業績の多くはこれらの共同研究によるものである。この数字は、39歳以下の若手研究者が中心となっており、39歳以下の若手研究者が中心である点も強調したい。また、本領域の集大成の一つとして、教科書としても使える「顔身体学ハンドブック」を出版したが、その執筆者の多くも領域の若手研究者であり(42名中18名)、新しい視点を取り入れた形のハンドブックになるとともに、若手研究者自身と研究分野の認知、さらなる共同研究の推進につながった。このような、領域内の共同研究のきっかけとしては、上記の領域会議や若手研究者同士のワークショップが重要な役割を果たしており、共同研究が有機的に拡張して行く場として非常に有効であった。

(3) 国際共同研究の推奨と促進：

本研究領域は、本質的に国際共同研究を前提としている。この点に加え、本研究領域を国際的に認知された学問領域とするためにも、若手研究者が中心となって海外との共同研究を行うことを推奨し、それを可能にするような体制作りを行った。具体的には、若手研究者を海外へ積極的に派遣し、海外共同研究の開始または促進を行った。さらには、若手研究者自身による外国人研究者の招聘も5回以上行われている。その結果、若手研究者主導による国際共同研究は20件以上にのぼっている。国際共同研究先としては、領域内で既に連携している連携機関をハブとした共同研究の拡張に加え、若手研究者が自分自身で開拓した連携先も10を超え(ラトガース大学、シカゴ大学、ヨーク大学、ウィーン大学、エセックス大学など)、順調な研究が行われており、今後の展開や拡張も期待できる。これは研究期間後半のコロナ禍の状況で行われていたものであり、かつ国内共同研究と同様に、国際共同研究もシニア研究者が行っているものを除いた数字であることを考えれば、驚異的な国際共同研究の進展であると言える。

これら若手研究者の育成への取り組みは、若手研究者の流動性とキャリアアップにも確実につながっており、多くの常勤職への就職に繋がっている(教授2名、准教授10名、専任講師6名、助教・助手6名、研究員6名)。また、日本学術振興会特別研究員PD及びDCに14名が採用、海外特別研究員にも7名採用、また領域に参加した外国人若手研究者が2名外国人特別研究員に採用されており、若手研究者が自身の研究を行うキャリアパスを着実に見出している。

さらに、研究そのものの質と研究内容の認知の向上にもつながっており、若手研究員の研究に対して、複数の学会から8回の学会賞が、日本心理学会・日本基礎心理学会・日本認知心理学会・電子情報通信学会を含む関連学会での研究発表に対して27回の発表賞が与えられている。特に、国際的に優れた業績を持つ中堅・若手心理学者に授与される日本心理学会国際賞奨励賞を2名の若手研究者が受賞(令和4年3月末現在で39歳以下でないものも含めば4名)したことは、本研究領域の国際性を示すとともに、科学技術分野文部科学大臣表彰「若手科学者賞」(令和3年度)が領域若手研究者による学際的な研究に与えられたことは、本領域が若手研究者を通じて、日本の学術の発展と新しい展開に寄与してきたことを示している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山口 真美、河野 哲也、床呂 郁哉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 241
3. 書名 コロナ時代の身体コミュニケーション	

1. 著者名 河野 哲也、山口 真美、金沢 創、渡邊 克巳、田中 章浩、床呂 郁哉、高橋 康介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 464
3. 書名 顔身体学ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 章浩 (Tanaka Akihiro) (80396530)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	河野 哲也 (Kono Tetsuya) (60384715)	立教大学・文学部・教授 (32686)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	渡邊 克巳 (Watanabe Katsumi) (20373409)	早稲田大学・理工学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計22件

国際研究集会 Face-Body Studies Wrap-up Symposium	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Workshop on Body Motion and Interaction: New technologies for Transcultural study	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 国際シンポジウム「ミックスレイスの顔身体表象 - 学際的研究を目指して」	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 国際シンポジウム“Performing the Self and Playing with the Otherness: Clothing and Costuming under Transcultural conditions”	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 APCV企画シンポジウム「The early development of face and body perception」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 APCV企画シンポジウム「Science of facial attractiveness」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 日本心理学会大会公募シンポジウム16「顔認知の発達と障害と」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際シンポジウム&ワークショップ「Radical Embodied Cognition, East and West」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 日本顔学会大会公開サテライトシンポジウム「顔の科学：内側から見る顔」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際ワークショップ「臨床神経学と現象学」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 心理班若手合同ワークショップ	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 James Tanaka教授公開講演会「From Milliseconds to Decades: The Creation and Retrieval of Holistic Face Memories」	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 国際シンポジウム「人と人にあること：協調と競合の対人間ダイナミクス」	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 日本心理学会大会シンポジウム「顔魅力の心理学」	開催年 2018年～2018年

国際研究集会 ション・ギャラガー招聘シンポジウム「匿名の視線と自己の成立」	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 中央大学人文科学研究所共催国際シンポジウムーパスカリス教授、北山忍教授をお招きしてー	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際シンポジウム「イレズミ・タトゥーと多文化共生「温泉タトゥー問題」への取り組みを知る」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際理論心理学会における顔身体シンポジウム	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 オリヴィエ・パスカリス教授公開講演会	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 B.アンドリュウ講演会と公開シンポジウム	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 顔身体学領域国際ワークショップ@パリ	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ミシガン大学	ネヴァダ大学	シンシナティ大学	他2機関
フランス	グルノーブル・アルプ大学	Ecole Normale Supérieure		
イタリア	ミラノ・ピッコカ大学			
オランダ	ライデン大学	マーストリヒト大学		
スイス	フリブール大学			
オーストラリア	ニュー・サウス・ウェールズ大学	ウーロンゴン大学		
英国	ロンドン大学	オクスフォード大学	ヨーク大学	